個・関係性・人格性
―ルターの問題と我々

東京大学名誉教授
松浦 純

東京大学名誉教授。東京大学文学部助手、東京都立大学講師・助教授、東京大学文学部助教授・教授・大学院人文社会系研究科教授を経て、現在同名誉教授。専攻はドイツ語ドイツ文学とりわけ中近世文学・思想。著書・編著・訳書として、『ファウスト博士 付・人形芝居ファウスト』（『ドイツ民衆本の世界』第3巻、国書刊行会、1988年）、『十字架と薔薇――知られざるルター』（シリーズ「精神史発掘」、岩波書店、1994年）、Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11 (Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers 9), Köln/Weimar/Wien (Böhlau) 2009など。

今から五〇〇年前の一五一七年十月三十一日、ドイツの修道士マルティン・ルターは、ヴィッテンベルク城内教会の扉に九十五箇条の討論命題を掲示し、中世ヨーロッパのローマ・カトリックに対する宗教改革運動に踏み出した。十月三十一日は「宗教改革記念日」として、多くの国のプロテスタント教会で祝われているが、ちょうど五〇〇年前の今日、一五一七年十一月十一日は、ルターが友人であり古典学者、神学者であるヨハネス・ラングに手紙を送り、ヴィッテンベルクの外へ向けて広く討議を呼びかける行動を起こした日であり、十月三十一日とセットとなって宗教改革記念日のひとつとして記憶に留めておくべき日だと言える。

五〇〇年前のルターの行動の意図がどのようなものであったかは、ルターが十一月十一日にラングに送った手紙からも読み取れる。例えば、「傲慢なしに、あるいは少なくとも傲慢に見え、構えて争いを求める疑いをかけられることなしに、新しいことは何もできない」という文面からも、大胆な文章表現とともに、「新しいこと」をしようとしている明確な改革者としての真情がうかがえる。さらに最後の署名には「兄弟マルティヌス・エレウテリウス」と書いているが、苗字の方をルターと書かずに、エレウテリウスとしているのは、それが「自由な者」を意味する語であり、改革者としての積極的な姿勢を示すものである。

ルターの姿勢として注目されるのは、標語のように用いられている「自由」と、「新しさ」の主張である。ルターの宗教改革運動の末、それまでのローマ教会の一元的体制が崩れ、カトリックとプロテスタントとで思想状況を大きく分けたわけだが、それはすなわち、人々にとっては「新たな選択肢ができた」ということであり、そして人々に「自由で主体的な決断の可能性をもたせた」ということを意味している。

ルターが果たした役割についての見方は、大きく分けて三つある。一番目は、「近代へと向かう決定的な一歩を記した」という見方である。これは啓蒙主義から古典主義、ドイツ観念論にかけての思想家たち、レッシングやヘルダー、ヘーゲルなどによる。人々はひとりひとりがそれぞれ神の前に立っていて、それぞれの個人が直接、聖書から神の言葉を読みとり、我がこととして受けとめるのが信仰である。ルターの宗教改革は、「宗教的圧制から、あるいは伝統主義のくびきからの自由」、「良心の自由」、「精神の自由」、「個人の自由な主体性」をもたらした、という見方である。

そして二番目は、十九世紀末期のニーチェが主張する「逆に近代への発展を阻害した」という見方である。権威主義の拒否や個人と思想の解放などはすでにイタリアのルネサンスが進めていたことであり、むしろ、ドイツの宗教改革は時代遅れだとする。

そして、三番目は、十九世紀末から第一次世界大戦終結頃まで活動したエルンスト・トレルチが主張するもので、ルターと宗教改革は基本的に中世的な文化の枠内にあり、同時代のほかの宗教運動や思想家と比べても中世的な要素を示していて、もっと進歩的な傾向はむしろ抑圧した。決定的な変化は宗教改革の時代ではなく十八世紀の啓蒙主義をもって始まったのであって、その近代に貢献したのは、宗教改革で生まれたプロテスタンティズムそのものではなかった、という見方である。

これらの議論は本来もっと丁寧にとらえてゆく必要があるものだが、相争う見方の基本タイプをまとめてみると、「個」の自由ないし自律性、「人格性」をめぐる事柄が、問題の核心として浮かび上がってくる。

十九世紀以降の西洋社会の中で、ルターはどのような意味を持ち得るのであろうか。今日に至るまでには、ナチズムの全体主義にドイツの大勢が呑みこまれた歴史があり、第二次世界大戦があり、人類そのものを滅亡させうる大量破壊兵器の開発と蓄積があり、ドラッグや遺伝子操作など人格の根幹に関わる技術の発展があり、個人の関心や好みまでコントロールされてしまいかねない情報支配があり、「個」や「人格性」の概念自体、有効性が疑われてきている状況がある。宗教改革五〇〇年の機会に、改めて「個」「関係性」「人格性」、そして「自由」といった事柄を焦点にルターを振り返り、考えるということは今日の社会のあり方を再考するヒントになるのではないだろうか。